

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有  
〒190-0013  
東京都立川市富士見町2-12-13 安藤ビルB1F  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

# 東北復興

Rising up, TOHOKU!

2013年(平成25年)4月16日 火曜日

無料

## 第11号

毎月発行

創刊2013年(平成25年)4月16日 火曜日



松島五大堂

### 松島の現在の状況

松島では日本酒の販売を営む「むとう屋」さんを訪

なかも印象に残った話は、3・11の大震災発生直

### 松島の3・11秘話

先月三日、四月二十七日(土)に渋谷で開催する「三陸酒海鮮会」の打合せのために松島と石巻を訪問した。同時に、松島と石巻の復興状況を見て、聞いてきた。それをレポートする。

松島の観光協会は結束が強く、自立独立の気概もあって、震災直後から現在まで独自に方針を決め、さまざまなことを実行してきたという。そうしたこともあつての七八割回復であろう。何もしなければそこまで回復することはむずかしい。

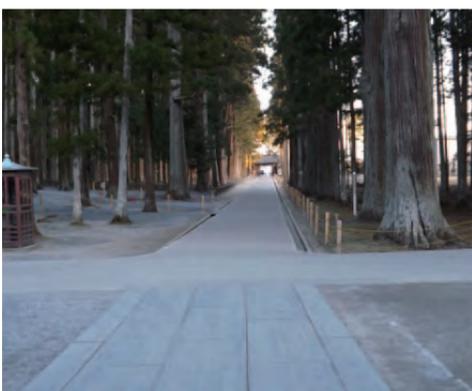
## 『松島・石巻復興レポート』

### 松島3・11秘話 生産の復興は消費支援次第

問。イベントの打合せを終えてから佐々木社長に震災以後から現在までの状況をお聞きした。

松島には震災以降、大分観光客が戻って来ているという。とはいえ震災前の七八割程度。まだまだである。それでも佐々木社長は、他の被災地に比べれば松島はほとんど被害も小さく恵まれているので、他の被害の甚大な被災地へ支援をしたいと語っておられた。

松島の観光協会は結束が強く、自立独立の気概もあって、震災直後から現在まで独自に方針を決め、さまざまなことを実行してきたという。そうしたこともあつての七八割回復であろう。何もしなければそこまで回復することはむずかしい。



瑞巖寺参道

後に松島にいた観光客への対応である。当時松島にいた観光客は二〇〇〇人強。交通も通信も遮断され、観光客は行き場を失った。観光客ゆえに土地のことを何も知らないし、まったく無防備な状況であった。

### 五大堂と宗教心

松島で有名な建造物で一番目といえば「五大堂」である。この「五大堂」は、3・11でも壊れなかった。佐々木社長さんは保存会長でもあり、大修理のための資金集めを覚悟したそうであるが、奇跡的に助かった。むしろ、「五大堂」は普段

多量の食材があつたが、停電のため、痛みやすい食材から順次、収容した観光客に提供した。佐々木社長がたまたま訪れたホテルでは、「カニ汁」が出たそうである。またあるホテルで

は炊き出し用の米が底をついたが、他から有償で調達して炊き出し分を確保したという。緊急時とはいえなかなかできることではない。

こうした事実はまだあまりメディアでは報道されて来なかった。結束の強い観光協会の気風によき、判断の早さ、瑞巖寺の決断を賞賛したいと思う。

実は当日は早朝から仙台からの高速バスで石巻に移動する予定であった。しかし定員オーバーで乗れなかった。あとで分かったのだが、石巻の石ノ森萬画館のリニューアルオープン日に重なり、それを目当ての観光客が仙台でバスに大量に乗り込んできたためだ。おかげでイベントの打合せに遅刻してしまった。



瑞巖寺入り口

訪問先の木の屋石巻水産は、四月は新工場の引渡しで大忙しであった。そうした

### 生産と販売の二重復興

これは何となくここからが正念場を迎えるのだ。これから始まる復興支援の第二ステージとは、一時的な義援金ではなく、日常的な継続的な支援である。しかし、震災後二年を過ぎ、あのショックな津波の

たなかでの打合せを終え、帰りの車のなかでの木村社長がぼそっとつぶやいた言葉が耳にこびりついている。「補助金で工場を建てた方がいいが、どうやって売ってほしいのか」。

被災地には生産の復興だけでなく、一度よそに去った顧客呼び戻しという復興が待ち受けている。ここまでは無我夢中できたことだろうが、いよいよここから

映像も忘れてしまう国民性が懸念材料でもある。むとう屋の社長も言っていたように、これからの復興支援とは、被災地の産物を「飲んで食べて、楽しんで欲しい。それが支援につながる」ということなのだ。

翌日は仙台でいつもの「東北を何とかする会」の例会。三ヶ月ぶり、溜め込んだ話を吐き出そうとする時間が足りない。あつという間の三時間だった。帰りに仙台駅までタクシーに乗った際、東京では



復活 石ノ森萬画館



木の屋石巻水産新工場

「仙台バブル到来」は事実ではない

### 「仙台バブル到来」は事実ではない

「東北を何とかする会」の例会。三ヶ月ぶり、溜め込んだ話を吐き出そうとする時間が足りない。あつという間の三時間だった。帰りに仙台駅までタクシーに乗った際、東京では

仙台はバブルが起きているという噂で持ちきりと伝えたら、「とんでもない、仙台のタクシー業界は依然として厳しい、飲み屋街も客が少ないので奪い合いの状況」と言っていた。確かにホテルは料金を二割ほど引き上げたのは事実だが、いったいどこからこんな噂になつていくのか、不思議なことだ。沿岸部などはひどいものだ。復興など何も進んでいないのだ。

こうした根も葉もない噂が東北の復興支援にブレ一キをかけ、復興がどんどん遅れることがないよう祈るだけである。

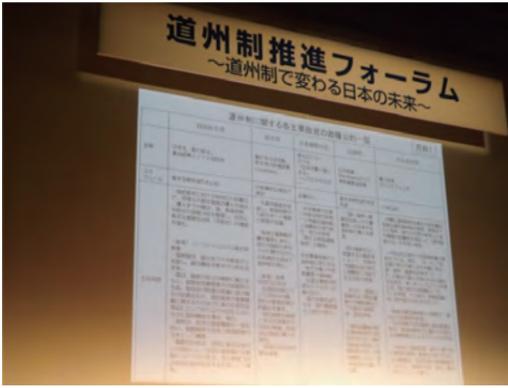


アニソンイベント



木の屋缶詰コラボ商品

# いよいよ東北州の実現か 道州制導入、今度こそ本物？ 『道州制推進フォーラム』



先月三十一日に東京・銀座の時事通信ホールで開催された『道州制推進フォーラム』に記者として参加した。主催は「道州制推進知事・指定都市市長連合」で、自民、民主、維新、公明、みんなの五党の議員による討論がメインであった。

このフォーラムの存在

## 唐突な法案提出の話

最初は正直いってあまり面白い展開ではなかった。細かな政策の違いについて各党の説明があったが、これまでに聞いた範ちゅうを越えるものではない。忙しい時間を割き参加して失敗したかなと思いはじめた。

しかし、その型通りの進行を



村井宮城県知事

を知ったのは知人である仙台の喫茶店マスター情報による。ぜひ出かけてみてはどうかとおすすめがあり、最近では道州制論議も進展していない印象だが、そうしたなかでの開催で何か変化があるかと期待したこともあった。また、村井宮城県知事も参加するということがひょっとしたら、直接東北の道州制について質問の機会があるのではないかと期待したこともあった。

最初は正直いってあまり面白い展開ではなかった。細かな政策の違いについて各党の説明があったが、これまでに聞いた範ちゅうを越えるものではない。忙しい時間を割き参加して失敗したかなと思いはじめた。

## 唐突な法案提出の話

最初は正直いってあまり面白い展開ではなかった。細かな政策の違いについて各党の説明があったが、これまでに聞いた範ちゅうを越えるものではない。忙しい時間を割き参加して失敗したかなと思いはじめた。

を知ったのは知人である仙台の喫茶店マスター情報による。ぜひ出かけてみてはどうかとおすすめがあり、最近では道州制論議も進展していない印象だが、そうしたなかでの開催で何か変化があるかと期待したこともあった。また、村井宮城県知事も参加するということがひょっとしたら、直接東北の道州制について質問の機会があるのではないかと期待したこともあった。

長すぎる膠着状態を何とか打破してもらいたい。細かな議論は後回しで良い。細かな点まで詰めてから実施するのはあと何年、何十年かかるか分からない。しかも、この法案が通っても、道州制が一二年のうちに実施されるわけではない。ずつと先である。もう議論のための議論はもうやめましょうと提案したい。

## 道州制導入後のビジョン論議がない

しかし、残念なのは道州制をいかにして導入するかの議論があつても、導入した後の日本がどうなるかについての議論がまったくなかったことである。これでは何のために道州制を導入するのか分からない。片手落ちというレベルを超えて、本末転倒と言いたい。

そして国民はここが一番知りたいのだ。どういった社会にするから道州制導入なのだと言及する姿勢が政府や各政党、政治家に求められているのではない。もし、いまの日本が抱える大きな課題のうちのいくつかが、この道州制導入で解決するならば、国民は喜んで賛成するにちがいないし、一挙に関心が高まることと請け合いたい。

## 百年続く

### 地方分権論議

最近の道州制論議も含め、地方分権に関する議論はすでに一世紀を超えている。しかし議論ばかりで進展がない。このあまりにも

## とりあえず お金と労力と時間の ムダの削減

最近の道州制論議も含め、地方分権に関する議論はすでに一世紀を超えている。しかし議論ばかりで進展がない。このあまりにも

復興作業の遅れの構造について、みんなの党の寺田議員から函を使つての説明があつた。ひとつの仕事をするのに、権限が、国、県、市町村の三階層に分かれ、結果、予算も二倍以上。しかも時間もかかる。これは復興に限ったことではない。行政における国―都道府県―市町村の三重構造はあらゆる場面に存在するのだ。こんな状況をいつまでも放置する余裕がいまの日本にあるのだろうか。

## 先端としての『東北州』

筆者は以前、小著『東北独立』のなかで、東北の持つ豊富なさまざまな資源について書いた。しかし、それら資源はいつまでも素材に過ぎず、最終商品ではない。素材として関東圏へ送られ、そこで付加価値が付けられるという、素材供給基地という位置づけに甘んじてきた。

『東北州』実現の折には、この構造を打破してもらいたい。素材としての資源をここ東北で商品に仕上げる産業を興し、単なる素材供給基地の看板を下ろして欲しいと願う。

## 大逆転！ 一挙に東北州実現へ

東北は道州制論議では大きく出遅れていた。というよりも驚くほど関心が低かった。結果、他の地域からは一番の消極派と思われてきた。さらには道州制不賛成とも思われてきたのでは

しかし、この法案が可決されたら否が応でも道州制に組み込まれる。それが突然現実味を帯びてきたのだ。『東北州』の実現となるのだ。そうすれば、これまでのいきさつなど忘れて積極的に道州制のメリットを探り出して欲しいと思う。

## 村井知事へのぶら下がり取材

また当日はフォーラム終了後に、メディア記者として初めてぶら下がり取材というものを敢行した。最初は遠慮しつつ遠巻きに推移を見ていたが、村井宮城県知事が「もうこれでいいですか？」と切り上げようとした瞬間、筆者は思わず手を上げていた。

『東北州』実現の折には、この構造を打破してもらいたい。素材としての資源をここ東北で商品に仕上げる産業を興し、単なる素材供給基地の看板を下ろして欲しいと願う。



各党の出席議員



白熱する議論

また当日はフォーラム終了後に、メディア記者として初めてぶら下がり取材というものを敢行した。最初は遠慮しつつ遠巻きに推移を見ていたが、村井宮城県知事が「もうこれでいいですか？」と切り上げようとした瞬間、筆者は思わず手を上げていた。



ぶら下がり取材

# 『墓で眠っていないで 起きてください!』 鎮魂ではない—魂奮い(たまふるい) 岩手の民俗芸能に生きる—掬の心



平成二十五年三月九日、岩手県奥州市において開催された茶谷十六先生の講演会に参加いたしました。茶谷十六先生は、百姓一掬研究の第一人者であり、財団法人民族芸術研究所の理事を勤められていらっし



やいます。茶谷先生のお話を伺うのは三回目でしたが、前回に続き『一掬の心、芸能の心』という演題でお話いただきました。

『苦難の歴史が産んだもの』百姓一掬の盛んな土地には必ず民俗芸能が伝承されています。そして日本でも多く百姓一掬が起こされたこの岩手には、日本でも最も多くの民俗芸能が伝承され、かつその水準・完成度は非常に高いものだと評価されています。百姓一掬、民俗芸能、貧困、それがかつての岩手の姿なのですが、この三つが単に繋がるのではなく、そこにはこの土地に生きる人々の生き様

との関連があるのではないかと考えられました。

『亡くなった人と交わす魂の伝達「魂奮い」』岩手の民俗芸能は、その八割が供養のためのものです。そしてその供養は世間一般でのいわゆる『鎮魂』ではなく『魂奮い(たまふるい)』なのだと思われています。『やすらかに眠ってください』ではないのです。二子鬼剣舞(岩手県北上市)の師匠・及川充さんの言葉ですが、『鬼剣舞は踊るんじゃない、踏むんだ。剣を持つから剣舞なんじゃない、これは反問(へんばい)だ。』墓前で地を踏みしめ反問

## プロフィール

まつもと けいこ  
群馬県高崎市出身  
十年前に旅人として訪れた岩手の魅力に惚れ込み岩手県北上市へ移住。  
コンパクトカメラ片手に民俗芸能を観て回るのが至福の時間。

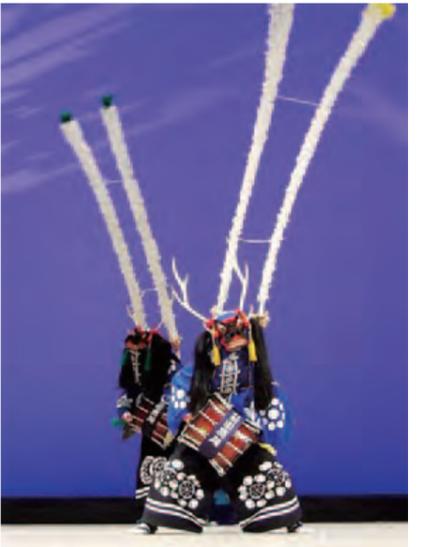


し、笛や太鼓を激しく打ち鳴らし、『眠っていないで起きてください。そしてあの世まで持って行った無念な気持ち、やりたかったこと、我慢出来ないことを私たちに話してください。生きている私たちがその無念を晴らしますから。』と魂で語りかけるのです。

『百姓一掬の心』一方、一掬というのは心をひとつにするのであり、相手を信頼することこそが結束の要。自らが極限状態であっても苦難を分かち合えることが結束の要。遠い昔から右手にはそれらが存在していたのですね。そして、その精神は今も脈々と生き続けています。

『民俗芸能の力が再認識された』

『百姓一掬の心』一方、一掬というのは心をひとつにするのであり、相手を信頼することこそが結束の要。自らが極限状態であっても苦難を分かち合えることが結束の要。遠い昔から右手にはそれらが存在していたのですね。そして、その精神は今も脈々と生き続けています。



『心をひとつにしお互いを信頼すること、どのような極限状態であっても苦難を分かち合えんとする深い絆が息づく小さな地域の輪が数多く存在しています。結束力こそが一掬の要であるならば、その固く結ばれた手を更に大きな輪へと拡げ繋ぐことは出来ないものかと思ってしまうのです。』

『百姓一掬の心』一方、一掬というのは心をひとつにするのであり、相手を信頼することこそが結束の要。自らが極限状態であっても苦難を分かち合えることが結束の要。遠い昔から右手にはそれらが存在していたのですね。そして、その精神は今も脈々と生き続けています。

『歩き出した心と変わらない現状』

『百姓一掬の心』一方、一掬というのは心をひとつにするのであり、相手を信頼することこそが結束の要。自らが極限状態であっても苦難を分かち合えることが結束の要。遠い昔から右手にはそれらが存在していたのですね。そして、その精神は今も脈々と生き続けています。



「岩手山」



「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」その③

「地名研究から古代東北のイメージを覆す—地名研究家・太宰幸子氏・後編」

(前号から続く)  
物部氏は

宮城北部に來ていた

古代の宮城北部と外部との人的交流は、「俘囚」の移動や「たたら製鉄の職人」の流入、熊野修験者との交流、関東からの移住などがあり、かなり活発であったことは前号で触れた。しかし「交流」はこれだけではなかった。

太宰氏によれば、蘇我氏との権力争いに敗れた物部氏もこの地域にたくさん来ていることが分かるという。物部氏の信仰していた香取神社、鹿島神社が宮城北部に数多く分霊されており、古川、鹿島台、三本木など大崎一帯に現存するという。蘇我氏との争いはまた一種の宗教戦争でもあった。新興宗教としての「仏教」

対「既存の古代神道」の戦いでもあった。「仏教」という外来の目新しい新興宗教を取り込む勢力が、「既存の古代神道」信奉の物部氏勢力に打ち勝ち、結果、物部氏ゆかりの人々が古代の宮城北部に移動してきたというのだ。

一連の話のなかで特に筆者の興味を惹いたのが、太宰氏の「仏教伝来までは『社』は不要だった」という発言である。金ぴかの仏像や寺院の仏教に対抗するため「社」が作られたということだろうが、それまでの古代神道の祈りの場とはどんなものであったか、とても興味深い。

産金と仏教

産金でもこの宮城北部は有名で、遠田郡涌谷町に日本初の産金に関わる黄金山神社がある。その金が東大寺大仏に使われ、一挙に有名になった。またそこだけでなく、宮城北部一帯で金を産出したらしい。

製鉄、稲作

また太宰氏によれば、物部氏の移動はこの一帯の稲作浸透とも時期を同じくするという。ここに製鉄との関わりが出てくる。前号では、鉄と刀の関係を見たが、

黄金色に輝く仏像を初めて見て心動かさない者はいない。その結果、金への欲望に火がつき、この地域で一種のゴールドラッシュを引き起こしたに違いない。既存の宗教の形骸化もあつたのかもしれないが、当時の人々は、金ぴかの仏像をはじめとした新たな宗教とその宗教装置に心奪われてしまったのであろう。

また、こうした裏には朝鮮半島から渡来した金採取技術者が活躍したことも知られている。その点で古代の宮城北部は国際的だったとも言える。前号に出てくる陸奥国守百済王敬福も渡来系であった。そこにいた渡来人とその子孫はひとりやふたりではなかった。



太宰幸子氏

鉄の用途としては、刀よりも、鍬などの農具に使用されていたと氏は指摘する。とはいえ、高価な鉄を全面に使用した鍬ではない。土に食い込む先端部分だけが鉄製の鍬である。その鍬はこの時代に作られたが、驚くべきことについて数十年前の東北でもそうした鍬が使用されていたという。

それはともかく、それまでの石製の鍬と鉄を用いた農具では生産性に大きな違いが出る。試してみればすぐその違いが分かるだろう。この画期的な鉄を用いた鍬の出現とこの地域の稲作本格化は密接な関係がある。

人口増加と生産性向上

これは筆者の想像の域を出ないことであるが、当時の日本に朝鮮半島からの大量の移民が来たこと、東北への稲作浸透は大きな関係があるのではないか。一説には数十万とか百万を超えるとかいう規模の移民で

ある。縄文時代の人口のピークが日本全体でも三〇万人程度であるから、その移民の規模は想像を絶する。

この移民の食料や住む場所を確保するため西から東北に進出してきたとしても不思議ではない。日本全体で三〇万人の食料を確保する縄文の農業生産性と、それを上回る移民を養う農業生産性が異なるのは当然であり、そのため東北という新たな開拓地と鉄の農具と稲作の一気に浸透があつたのではないか。

ただ、当時、鉄は高価だったと思われるので、誰でも鉄使用の農具を所持していた訳ではないと太宰氏はいう。例えると、当時の鉄は、現代のダイヤモンドほどの価値があつたという。とすれば、一般の農民などは使えるわけもなく、当時の金持ちの事業家が国の稲作奨励の流れで、ここに進出し、革新的な農具で一挙に稲作を普及していったことは十分に考えられる。

プロフィール

一九四三年宮城県大崎市鹿島台生まれ。  
日本地名研究所会員、宮城県地名研究会会長、東北アイヌ語地名研究会会長、みやぎ街道の会顧問  
編著書・共著 『要書』地名調査研究報告書(宮城県地名研究会)、「金属と地名」(三一書房)、仙台江戸

泥田から

耕作面積拡大

鉄製農具が普及するまでの石製農具を用いての耕作には限界があつたであろう。古い時代の陸稲による稲作や水田稲作はむずかしかつたに違いない。そのため自然に水が入るように工夫された田での稲作が主流だつた。そのため収穫時にはぬかり田に田舟を置き、穂先だけを刈り取る方式も行われた。

しかし、これだけでは耕作面積は限られる。大量の食料需要のために耕作面積の拡大が必要だつた。そこで鉄製農具の出現により、水田稲作が可能になり、耕作面積拡大、食糧増産という流れになつたことも考えられる。

物部氏、香取神宮・鹿島神宮、産鉄

筆者は以前から、宮城北部に流入してきた「たたら製鉄の職人」はどこからきたのかに興味があり、いろいろ調べていたら、柴田弘武氏の『風と火の古代史』よみがえる産鉄民という書物に行き当たつた。

この本によると、千葉や筑波一帯に、鉄にちなんだ地名が驚くほどたくさんあるという。また、この一帯は、物部氏の信仰する香取神宮、鹿島神宮の総本社のある場所と重なる。

ここからは筆者の単なる推測であることをお断りしておくが、当時の物部一族の本拠地は千葉、筑波一帯であり、そこから宮城北部に流入した。結果、宮城北部の「たたら製鉄の職人」は物部一族が主流であり、古代の刀鍛冶職人も物部一族である可能性が高い。物部一族と古代の宮城北部は切っても切れない関係にあると言えるのではないか。

もうひとつは、熊野をはじめとする修験者らによる製鉄技術の伝承であるが、これは今後探求すべきテーマとしたい。

人も文化も産業も激しくせめぎあう地域

今回の取材を通じて、また筆者の興味の赴くままの推測や想像も踏まえて出来上がったこの地域一帯のイメージは、取材前のものとは大きく異なつた。

産金の事実などは個別の知識として知つてはいたが、かくも激しい人的交流が存在し、文化も産業も短期間で流入し、そうしたなかで大和朝廷の進出ということがあつたのである。

まだこの地域の掘り起こし作業が終わつたといえる状態にはほど遠い。むしろこれからの探索が楽しみである。掘れば掘るほどさまざまな刺激的な事実が出現しそふである。

アテルイの時代に続く

最近、アテルイとその時代がようやく注目を浴びるようになった。しかし、さまざまな小説やドラマで描かれるその時代の東北と東北人は、野蛮で、文化も遅れ、まるで数千年前の縄文人のイメージそのままである。明らかに時代考証が誤つていえると思えるのだ。

少なくとも、アテルイの時代を遡ること数十年前までに、もっと激しい人や文化、産業、権力のぶつかり合いがあつたのだ。したが

つて、そこは野蛮な文化果つる地ではない。もっと時代の先端を行く地域であつたのだ。

それでも、ほんの少し前まではアテルイのことを知らない東北人もいっぱいいたのだから、その存在を知ることが、この地が、時代の先端を行つた地であり、かつて激しく大和朝廷と争つた地であり、物部一族熊野修験者、渡来人などが交錯する地であつたことを思い起こして欲しいと願う。



「地名は知っていた 上下巻」  
河北新報出版センター  
各 840 円



「みやぎ地名の旅」  
河北新報出版センター  
840 円

# 東北の「独立」はお話の中だけのことか

## 東北の「独立」を扱った小説

東北の独立を扱った小説として最も有名なのは、井上ひさしの「吉里吉里人」だろう。これは、東北地方のある小さな村が政府に愛想を尽かして、「吉里吉里国」を名乗って独立を宣言する、というものである。

スケールの大きなストーリーが特徴的なのが西村寿行の「蒼茫の大地、滅ぶ」である。現在では絶版となつてしまっているが、上下二巻からなる大作である。実は以前、拙ブログでも詳しく取り上げたことがあるのだが、今回は再度この小説を題材に、東北の独立について考えてみたい。

飛蝗というトノサマバツタなどの変異種がいる。時折大量発生して大集団を作り、植物や作物を食い尽くす飛蝗が中国大陸で大発生して総重量二億トンという想像を絶する巨大な群れとなり、日本海を渡って東北地方に襲来、東北地方はありとあらゆる農作物を食い尽くされ、深刻な飢餓状態に陥るという設定である。

「そんなこと起こるわけがない」と思ってしまうが、実は有史以来現代に至るまで人類は度々蝗害に襲われている。日本でも、二〇〇七年に開港市前の関西空港第二滑走路にトノサマバツタが数百万匹という大量発生をしたことがあった。実害はなかったが、このように何の前触れもなくバツタが突然大量発生することはあり得るのである。

飛蝗が最初に降り立った青森県では津軽平野の農作物が瞬く間に食い尽くされる。与党の幹事長を務めながらの総理とまで言われながら中央政界を引退して青森県知事となつていた野上正明は、東北六県から若者を六〇〇〇人集めて「東北地方守備隊」を結成させ、混乱の收拾に努める。一方、政府は被害の拡大に備えて、全国の備蓄米を東北分も含めてすべて首都圏に集めようとするが、食糧難に喘ぐ東北からの備蓄米の搬出は東北地方守備隊に阻止される。その後、飛蝗は岩手県へ南下、さらに宮城県、秋田県、山形県へも広が

り、米や野菜は軒並み食い尽くされ、食糧難が深刻になり、治安も悪化する。蝗害の影響で株価が大暴落、円の価値も下がる。政府が決定した被災地支援は六〇〇〇億円の救済費割り当てのみ。失業や食糧難で暮らせなくなった東北地方

の住民は一五〇万人もの難民となつて首都圏を目指す。警察力で阻止し、東京都周辺の各県も難民の滞在と国道以外の通行を禁じて締め出しを図る。苦境に立つ東北地方の住民に向けて、野上知事は他の東北の知事と共に、東北六県の日本国からの独立、そして「奥州国」の建国を宣言する、というのが「蒼茫の大地、滅ぶ」のストーリーである。

蝗害以上に「東北の独立」が現実になり得ない設定ではないか、と思われるかもしれない。しかし、実は東北が実際に独立を目指したことが歴史にあつたとされる。本書の中でも紹介されているが、他でもない明治維新の時である。

この時、奥羽越列藩同盟は輪王寺宮公現法親王を推戴した。輪王寺宮公現法親王は「東武皇帝」と称した。年号も「大政」と改元した。諸外国に使者を送り貿易開始の要請も行った。これはまさに「もう一つの日本」ができたような様相である。当時のニューヨークタイムズは、「日本の東北地方に新帝が立ち、二人のミカドが並立する状況になつた」と伝えていた。そう

で東北六県全部が日本国から独立を果たす、という

るまで人類は度々蝗害に襲われている。日本でも、二〇〇七年に開港市前の関西空港第二滑走路にトノサマバツタが数百万匹という大量発生をしたことがあった。実害はなかったが、このように何の前触れもなくバツタが突然大量発生することはあり得るのである。

飛蝗が最初に降り立った青森県では津軽平野の農作物が瞬く間に食い尽くされる。与党の幹事長を務めながらの総理とまで言われながら中央政界を引退して青森県知事となつていた野上正明は、東北六県から若者を六〇〇〇人集めて「東北地方守備隊」を結成させ、混乱の收拾に努める。一方、政府は被害の拡大に備えて、全国の備蓄米を東北分も含めてすべて首都圏に集めようとするが、食糧難に喘ぐ東北からの備蓄米の搬出は東北地方守備隊に阻止される。その後、飛蝗は岩手県へ南下、さらに宮城県、秋田県、山形県へも広が

り、米や野菜は軒並み食い尽くされ、食糧難が深刻になり、治安も悪化する。蝗害の影響で株価が大暴落、円の価値も下がる。政府が決定した被災地支援は六〇〇〇億円の救済費割り当てのみ。失業や食糧難で暮らせなくなった東北地方

の住民は一五〇万人もの難民となつて首都圏を目指す。警察力で阻止し、東京都周辺の各県も難民の滞在と国道以外の通行を禁じて締め出しを図る。苦境に立つ東北地方の住民に向けて、野上知事は他の東北の知事と共に、東北六県の日本国からの独立、そして「奥州国」の建国を宣言する、というのが「蒼茫の大地、滅ぶ」のストーリーである。

蝗害以上に「東北の独立」が現実になり得ない設定ではないか、と思われるかもしれない。しかし、実は東北が実際に独立を目指したことが歴史にあつたとされる。本書の中でも紹介されているが、他でもない明治維新の時である。

この時、奥羽越列藩同盟は輪王寺宮公現法親王を推戴した。輪王寺宮公現法親王は「東武皇帝」と称した。年号も「大政」と改元した。諸外国に使者を送り貿易開始の要請も行った。これはまさに「もう一つの日本」ができたような様相である。当時のニューヨークタイムズは、「日本の東北地方に新帝が立ち、二人のミカドが並立する状況になつた」と伝えていた。そう

で東北六県全部が日本国から独立を果たす、という

るまで人類は度々蝗害に襲われている。日本でも、二〇〇七年に開港市前の関西空港第二滑走路にトノサマバツタが数百万匹という大量発生をしたことがあった。実害はなかったが、このように何の前触れもなくバツタが突然大量発生することはあり得るのである。

### 執筆者紹介

大友浩平

(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagmasi/



大友浩平氏

Facebook  
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

とはなかったわけである。

### 憲法に見る

#### 地方の独立

日本国憲法の第九十二条では「地方公共団体の組織及び運営に関する事項は、地方自治の本旨に基いて、法律でこれを定める」とされている。また、第九十四条では「地方公共団体は、その財産を管理し、事務を処理し、及び行政を執行する権能を有し、法律の範囲内で条例を制定することができ」とされている。九二条

の「地方自治の本旨」とは通常、住民自らが地域のことを考え、自らの手で治める「住民自治」と、地域のことは地方公共団体が自主性・自立性をもって、国の干渉を受けることなく自らの判断と責任の下に地域の事情に沿つた行政を行つていく「団体自治」の二点からなるとされる。九四条では、地方公共団体の特定の地方における行政機関としての役割を定めると共に、地方における「独自立法」としての条例制定権を認め

ている。憲法はこのように、地方自治についてあえて一つの章を設けてその権利を保障している。その上に立つて、小説の中で野上知事九二条は「確認事項」であつて、憲法で言う地方公共団体は国家の成立以前から自然発生的に存立しており、そこに自治権も自然発生的に成立していた権利

であるから、個人の基本的人権と同様に、地方自治の権限を国が立法で制限することは許されないと主張している。

にも関わらず、国と地方の間に厳然たる上下関係があるように見えるのは、事実ある毎に槍玉に挙がる「三割自治」の問題のためである。一方に憲法で認められた「地方自治の本旨」というものがありながら、実際には財源を押しえられていくために、国の意向に沿つた形では自治体はその権限を行使できないという実態があるのである。最近、「一票の格差」を巡つて「違憲」「違憲状態」という判決が相次いで出されたが、国と地方を取り巻くこのような固定化されている現状こそ「違憲状態」なのではないだろうか。

かつて沖繩の読谷村長だった山内徳信氏は「地方は末端にあらず、国の先端なり」と喝破した。この言葉に込められた地方の気概に、今だからこそ思いを至らせるべきだと思う。地方のことは地方にいる自分たちが最もよく分かっているのだという自信と確信を持つて、画一的な国の方針を超えた地方の独自性、自立性を、憲法に明記されている趣旨に則つて確立していく時期に来ているのではないだろうか。たとえ財政の自立は難しいのだとしても、精神の自立から始めることは可能である。

### 東北の「独立宣言」

本小説の白眉は何と言つても、東北の「独立宣言」の箇所である。小説の中で、東北から首都圏を目指した多数の難民が、「難民受け入れ拒否」を告げた東京都と荒川で衝突し、多数の死者を出した。その後、野上知事はテレビとラジオで緊急会見を開き、東北の独立を宣言したのである。

その中にこのようなくだりがある。「諸君には東北地方人たる名誉を守ることが、願う。自分の足で大地に立つことを、お願いする。諸君に武器を向けた東京都に未練を抱く。中央政府に幻想を抱く。たゞ、餓え死のうと、意地は捨てな。フィクションの話ではあるが、東北に住む者として、強いメッセージを感じる。

今、東北は小説の中の蝗害に勝つとも劣らない大震災からの復興の途上にある。その震災復興を巡るこれまでの動きを振り返ると、残念な思いに駆られることも少なからずある。そこにこのメッセージである。

曰く、「東北地方人たる名誉を守れ」、「自分の足で大地に立て」、「東京に未練を抱くな」、「中央政府に幻想を抱くな」、「たとえ、餓え死のうと、意地は捨てるな」、である。

中央政府に過剰な期待を抱くことは禁物である。な

にももたらさず、そのような復興の姿が垣間見えるのではないだろうか。「グローバル」という言葉が最近よく聞く。「地球規模の視野で考え、地域視点で行動する(Think globally, act locally)」考え方のこととされるが、逆にローカルな営みが持つ可能性の大きさにも、その適用範囲を広げられるのではないかと私は考える。

原氏は、東北に集う「人」に対して、①自走する意識とスキルを持つ、②地域や分野を超えた対話を仕掛ける、③未来を大胆に思い描く、の三点を要請している。確かに、そうした人がこの東北の地で相互に影響力を及ぼし合えば、自分たちで決め、自分たちでつくる、東北の未来への道筋が拓けてくるに違いない。

東北の「独立」は、必ずしも政治的な独立を意味するのではない。東北にいる人たちが、自分たちのことは自分たちで決める、ということを決め、そのことを様々な場面、様々な領域で確かに実行に移した時、その時こそが東北が「独立」する時なのだと思う。



# 「ボーダーズ」 福島に寄せる

「歴史小説」ジャンルの元祖であり、スコットランドの国民的作家とも言われるウォルター・スコットが愛してやまなかった事から「スコッツ・ビュート」と呼ばれた絶景は、「ボーダーズ」つまりスコットランドとイングランドの国境地帯にある。同じく国民的詩人ロバート・バーンスの生涯も、国境に近いローランド地方にあった。スコットランドらしき、というといイングランドとは全く異なる北方ハイランド地方の荒々しい自然と風景、タータンやバグパイプ、ゲール語といった文化が挙げられるが、スコティッシュのアイデンティティを人々の心に焼きつけ、愛国心を鼓舞し



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出だし演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

つくづく、我が国「東北」にそっくりだな、と思ってしまうのだ。

\*

作家らの原風景は、むしろスコットランドとイングランドの個性が交じり合った、この「中間地帯」こそあったようだ。映画『ブレイブハート』に描かれた十三世紀スコットランド独立の英雄ウォレスは、実際にはローランド人、あるいは更に南のウェールズから渡ってきた一族だったが、映画は彼をスコットランドの象徴として描く為か、タータン付きのキルトを身に付けさせ、ハイランド人のように表現した。こうして見ると、実際に南方の敵国イングランドと関係を持ち、刃すら交えるのは国境を接したローランド地方であるが、その存在感を装飾し際立たせる為には背後のハイランド地方が必要だった、と言えるかも知れない。ハイランドの人々にしてみれば、ローランドはイングランド化が激しく、ハイランドを野蛮と嫌ってイングランドの尖兵同然にこの地の迫害を進めた仇敵でもあるのだ。しかしローランドがイングランドとの衝突の矢面に立ってきたからこそハイランドが守られてきた側面もあり、再びスコットランド独立の夢に燃えるローランドは自らのケルト性に改めて目覚め、ハイランド文化を守る壁として立っている。

しかし、こういった点が

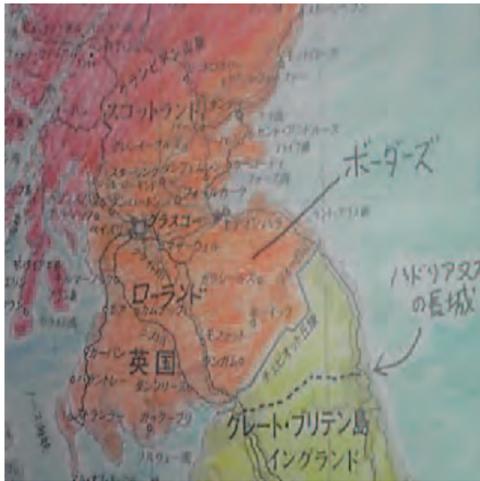
言うまでもなく東北は、一般的に北東北・南東北に分割されて語られる事が多い。星亮一氏の『東北謎解き散歩』(廣済堂出版)には、青森・秋田・岩手の方が東北らしい歴史や謎に満ち、山形・宮城・福島と東京に近づくほど平凡になる、などと書かれている。確かに、私自身「東北回帰」する契機になったのは、出身地山形県ではなく、北東北岩手県の文化との出会いだ。岩手の鹿踊り、青森のねぶたなど北東北の文化には、誰の目にも強烈な、異文化接触とも言えるインパクトがある。それこそが、ありきたりな日本人観・価値観を一変させ、東北人としてのアイデンティティに目覚めさせるのに必要な一撃だったのかも知れない。

しかし一方で、山形・宮城・福島の謎や魅力が本当に乏しいかという点、決してそういう訳ではない。ただ、北東北に顕著な異文化的インパクトという点では目に見え難く、比較的わかりづらい実態は確かにある。その中でも強烈な方と自負する我が出羽三山にしても、異文化というよりは仏教関連のひどく古風且つ濃密な世界といった趣で、若者に魅力が伝わりやすいというものはなかなかない。云わば、単純に「蝦夷」

的なのモノサシでは測れないもの、大和的なもの・蝦夷的なものが限りなく混沌とした中にある、何とも説明のし得ない文化こそが、この南東北の個性と言えるのではないだろうか。

\*

「蝦夷」的観点で東北を捉えようとすると、最も複雑な立場に置かれるのが、福島県の地域である。歴史的には、蝦夷と呼ばれる人々が組織的・軍事的侵略を未だ受けたい六世紀、国造制が敷かれた北限である



スコットランド(左)東北(右) '国境' 地帯

貼られつつあるようにも思われる。現地の人間にしてみれば、「勝手な線引きをするな」という憤りか、「私は征服者の子孫なので」という開き直りで応じるしかない。

\*

スコットランド南部と東北南部の地図を照らし合わせると、両者が非常によく似ているのがわかる。山形・福島の南端には、大和側が蝦夷の南下を食い止める為に築いたとされる奥羽三関跡があり、スコットランドの国境近くには、二世紀にローマ人がケルト人の南下を防ぐ為に築いたというハドリアヌスの長城跡がある(侵略者は大和人であり、ローマ人ではないか、と言いたくなるが、実は古代、蝦夷もケルト人も南方へ猛々しく侵襲した記録がある)。エディンバラやグラスゴウの南に山岳地方があるように、仙台、会津、福島などの中核都市の南には、国境を象徴する壁のように厚い山の連なりが立ち上るともむしる新潟県北部が東北の仲間入りで、福島県はほぼ丸ごとはずされるような印象になる。同様に、九世紀からの阿弭流為、奥州安倍氏に連なる対侵略戦争はアイヌ語地名とともに東北を南北に分ける根拠となっており、近年の見直されつつある蝦夷観の上では、抵抗を続けた北東北に対し早くに服従した南東北という不名誉なレッテルを

辺の風評被害という枠も超えて東北全体の歴史的因縁に関わる問題である事が、認知されるべきではないか。私はあらためて想いを強くするのである。

\*

極東の「ボーダーズ」福島にはしかし、実際には二つの「ボーダー」があるように思えてならない。それは福島県の人々に複雑な帰属意識の葛藤をもたらした、翻弄し続けているのではないだろうか。その一つは、繰り返すまでもなく南端の白河関、勿来関であり、東北地方の絶対的領域を示し、福島を東北の一員とするシンボルでもある。

しかしもう一つが、県北端、伊達郡阿津賀志山から阿武隈川まで築かれた、平泉藤原氏による十二世紀の長大な防壁跡である。藤原国衡はここで源頼朝の大軍勢を迎撃したが、それはこの地の大軍を食い止める為の地理的利点の他、ここより北が彼らの確実な勢力範囲だった事を意味したと思われる。今や平泉は東北の象徴のように捉えられつつあるが、福島の人にとっては、平泉と福島どちらが見捨てたかともかく、今ひとつ同調できない感があるかも知れない。この北の見えないボーダーは、福島がむしる北関東、更には中央の方につながるようとする動きの道標のように存在し続けたのではないだろうか。

原発事故は、この二つのボーダーの間に挟まれた人々の心の中に何通りかの相反する思いを渦巻かせる事になったと推測される。一つは、自分たちは中央を支えてきた重要な一部なのだから、然るべき救済が中央より為されるべき、という気持ち。これは最も一般的な意識で、原発事故自体が中央の責任なのだから当然であるが一方で、中央への従属関係を肯定し維持するのが問題になる。

二つは、もはや福島を植民地としか見ていない中央は信用ならず、東北他県とともに状況を打開しなければならぬとする、東北帰郷の想い。これは「東北六魂祭」に象徴される、東北共通の民族意識や苦業の共有を是とした、最も前向きな意識と言える。

そして三つは、中央も東北も、福島のことなどどうでもよいように信用ならず、もはや福島は孤立し、滅びを待つのみ、という諦観。これは、最も悲観的だが、残念ながら最も現状を表している。原発・放射能関連の処理は中央に、避難生活などの生活支援は東北に期待しても両方とも上手くいっていないと言いたい。中央も東北も、福島を緩衝地帯という名の「生贄」にしか考えていないのではないかと、疎外感と絶望感。福島が孤立する事はこの負の感情以外何も生む結

果になるまい。

\*

福島の人々にしてみれば、現状東北と中央どちらに帰属意識を持つかどころの話ではなく、当然周囲一丸となつての支援を望んでいるはずである。しかし今東北側にいる私達は、たとえ中央が事故原発に対する責任を放棄したとしても、東北全土で福島を支え、海外とも直接連携した技術力(例えば、東北大学が原発内作業用ロボットの開発をリードする)などを以て立ち向かっていく気概を持たねばならないと思う。その志なくして、そして福島なくして、東北の復興、そして独立はあり得ないのだ。

\*

不思議な事だが、スコットランドのボーダーズ同様、東北の「国境」周辺には那須や尾瀬始め美しい土地が広がっている。明治初期、スコットランドの旅行家イザベラ・バードが「東洋の桃源郷」と絶賛したのも、我が山形県多くの人が避難してくる事になる内陸の盆地であった。会津戦争以来、スコットランドさえ経験した事のない、国境地帯宿命とも言える災禍の中、福島そして南東北には今、日本のどこにもない、国のあり方を問う最前線が開かれつつある。新たなスコットやバーンス、人々の心を動かす存在は、きっとどこから登場してくるに違いない。



高清水高原夕景

# シリーズ 遠野の自然 「遠野の樹木」 遠野 1000 景より



ゲゲゲの木



渋柿の木



霧中の木



高清水高原の夕焼け

シリーズ『遠野の自然』の第二回目のテーマは「遠野の樹木」です。今回も前号同様八枚の写真を掲載しました。前号の「社」と「樹木」で「木」つながりとしてみました。

遠野の樹木はさまざまな表情を見せています。季節、時間、もちろん樹木の種類、果実などにより多彩な表情があります。また、樹木の立つ場所によっても表情を大きく変えます。

掲載した写真では、季節的には冬のもの、時間帯的には夕方もの、種類としては大きな木が多くなりました。これはひとえに筆者の好みによるものです。

筆者は特に葉の落ちた樹木が好きです。とても細い枝が、夕暮れの空に映える景色はたまりません。盛夏の葉の茂る樹木も良いですが、細密画のように、ある

いは葉脈のように広がる細かい枝が、夕焼けまえの瞬間の空、そして夕焼け真っ只中の赤い空、どんどん濃くなる暮色の空に映える景色が好きでたまりません。年齢のせいなのかもしれませんが、沈み行く太陽が最後の力を振り絞って輝く夕暮れ、夏の青葉や紅葉した葉などをすっきり落としたさびしげな枝、にぎやかな夏も実りの秋も過ぎて何もかもが静止したような冬、これらが絡まりあつて寂寥感を与えてくれる景色が何とも言えず好きなので

また、葉の落ちた樹木が群れをなす風景は、どこかおとぎの国のもののようにもあり、そして絵画的でもあります。特に、左上段の写真はあまりに好きになつてしまったので、強引に遠野一〇〇〇景さんをお願いして、筆者のFacebookのカバー写真として拝借しているほどです。

しかし、これほど澄み切った空は冬の季節です。遠野一〇〇〇景さんは寒いなかを撮影されていることを忘れてはなりません。かくいう筆者は寒いのは大の苦手ですが、とにかく冬の夕暮れの葉の落ちた樹木の景色が大好きなのです。この景色があれば寒さもきつと我慢できるでしょう。いつか遠野の冬の夕暮れを見に行こうと思います。その場にしばらくたたずんでみたいと思います。

でも遠野の樹木は冬だけが良いわけではありませんが、実りの秋はにぎやかです。

たわわに実った渋柿の実が紅葉した樹木とすばらしいコントラストを形成しています。渋柿は熟す前に食べては大変ですが、熟したら大変おいしい。鳥はそれが分かっています。

ウメモドキの色鮮やかな赤い実も鳥を誘っています。

紅葉の巨木と紅葉した葉、青い空。この紅葉の木はまるで巨人のようです。手を掲げて空を支えているように見えます。これだけ大きいと紅葉という木のイメージが変わります。



紅葉の木



ウメモドキ



こびとの出入り口

◇  
の何かに変身するかもしれないし、ひよつとしたら木そのものが動き始めるかもしれません。

こびとの出入り口。不思議な穴です。動物の穴にはみえません。まさに名前の通り、こびとの出入り口かもしれません。

◇  
遠野の樹木は、厳しい自然のなかで、大きく力強く、長い時間を生きています。そしてエネルギーにあふれています。遠野の里に行けば、さらに人里も離れれば、ここにあるすべての樹木と景色に出会えるのです。

# 名刹中の名刹

創建 702 年

## 【津観音】(三重県)

ある住職の東北被災地体験談  
犠牲者への供養のボランティア  
悲しみのなかに息づく宗教心に感動

# 笑い仏さん

福島への行脚

第七回

昨年、福島県を目指して鳥取県倉吉市を出発した「笑い仏」は、姫路、加古川、神戸、葛城、奈良を経て、ようやく東海に歩を進めました。最初の逗留地は三重県津市にある名刹「津観音」です。

創建は七〇二年というから古刹中の古刹です。南にある伊勢神宮への道中にあるため、津観音にお参りする人々も多く、「津に参らねば片参り」と言われるなど、参拝客でにぎわったと言います。建物は太平洋戦争の惨禍で全焼しての再建ですが、朱色の五重塔が威厳を見せています。

この古刹に「笑い仏」が訪れるきっかけは、MONKフォーラムのメンバーでもある僧侶の紹介によることです。彼の友人で、津観音の副住職を務める岩鶴密傳さん(三〇)が招いてくれたことで実現した逗留です。

◆  
そういえば、笑い仏さんが津に入る途中で出会った若い僧侶が、東北での体験談を教えてくださいました。仏さんの行脚とも関係するような内容だと思ったので、ここに記します。

「東北の大震災の映像をテレビで見るときに、これはえらいことだと思えました。」

二年前の三月をその僧侶は振り返ります。普通の生活をしている多くの日本人にとって、東北の震災は大

惨事ではあるけれど、ここではないどこかで起こったこと、現実感はなかったのかもかもしれません。しかし、彼は僧侶という立場上、法要などいろいろな場所で東北のことを聞き、また聞かれることがあったのです。

「これは東北に行くと、自分の目でその状況を見てこないといけない。テレビで見たことだけで『東北は大変ですよ』と言ったところで、自分の法話も中身が伴っていないものになる。だから、行こう。」

彼は、先輩の僧侶と六月に2泊のボランティアで宮城県に足を運びました。僧侶としてではなく、Tシャツ姿の一人のボランティアとして。

そこで見た現状は想像をはるかに超えていたものでした。

「指定された場所に行くと、津波に襲われたビニールハウスから泥水を掻き出す作業をしました。ですが、大の大人が一日中働いても、とてもどうにかなるものではなかったんです。でもここだけでなく、あちこちがそんな状況だったのだと思います。」

無力感にとらわれた僧侶でしたが、その後も彼なりの方法で、東北とは関わっていくことになりました。

「旅館の方と知り合いになったので、『どんなことが一番地元のためになるの

ですか?』と率直にお聞きしました。すると『来ていただくことが一番助かります』とのことでした。そこで、仲間を募り、その旅館に宿泊することにしました。せめてもの協力というのでしょうか。」

この僧侶は地元に戻ってからも、「何かできれば」と近所の商店街の方々と、復興イベントを考えているそうです。

そんな彼ですが、東北でボランティアをしているときに、強く感動したことがあったと教えてくれました。

「僕ら僧侶が被災地なんかにいくと、縁起もよくないという方もおられるので、身分は明かさなかったのです。でも打ち解けてくると、『実は僧侶です。』という話になるときもありました。すると、『申し訳ないが、ここで人が亡くなったから手を合わせてやってくれんか?』など、供養をお願いされたんです。これは、本当に自分にとって新鮮な体験でした。東北には仏教というか、宗教心が都会より根付いているように感じられたんですね。」

都会では仏教に限らず、宗教離れが加速していると言います。普段から僧侶などの宗教者との接触がないため、人の死に目などで、彼らに法要をお願いするときに、どこか身構えてしまう。それが一般的な都会人のメンタリティかもしれま

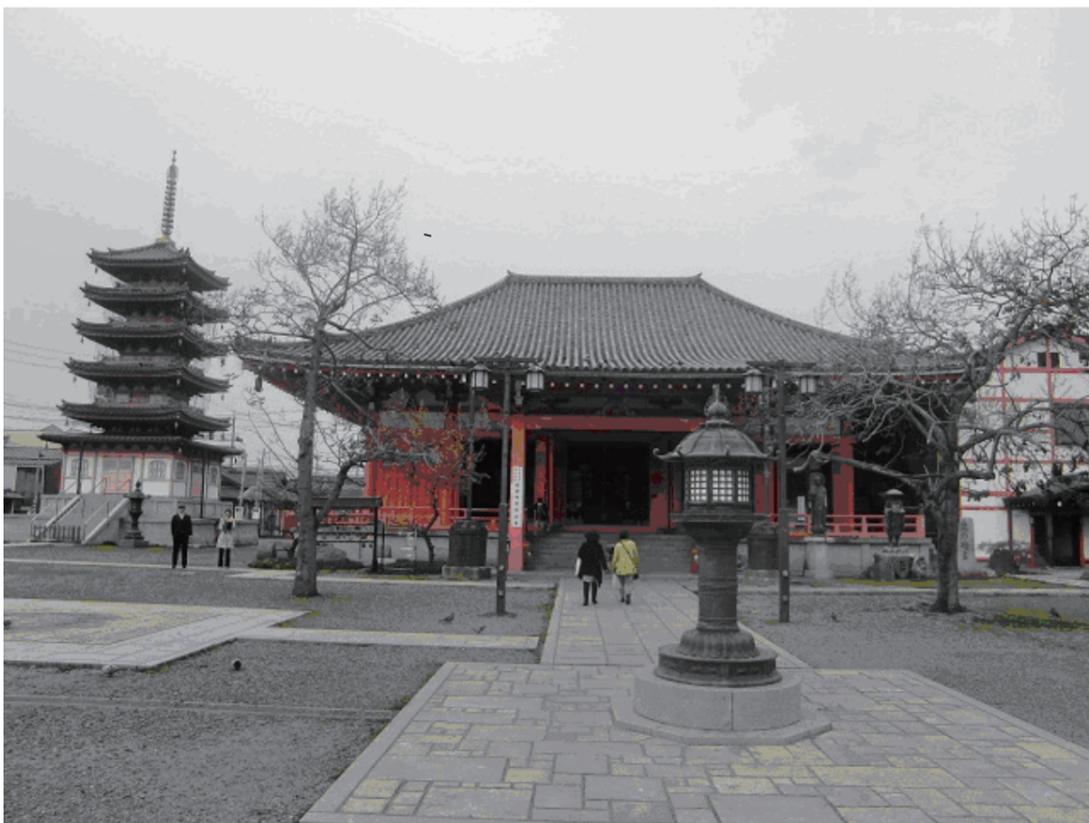
せん。

しかし、そんなぎこちない関係が東北にはなかったといえます。もちろん、それを彼は喜んでいたのでありません。人が亡くなるという受け入れがたい現実の前に、できうる限りのこととして縁者が供養をお願いする。これはもちろん悲しいことです。ただ、その悲しみの中に息づく宗教心に、東北を訪れた一僧侶が胸を打たれたのです。

事情は異なりますが、われわれMONKフォーラムのメンバーも震災後の東北を訪れる機会をまだ持ちません。ただ、「何かアクションを起こしたい」という熱いハートは持っておりま

す。その思いを「笑い仏」が東北へ運んでくれたらいいなと念じています。「笑い仏」の祭壇には、芳名帳と自由ノートを置いているのですが、そこには多くの方々のお名前と共に、さまざまなメッセージが添えられています。その東北を思う方の気持ち福島まで届けば…。

「笑い仏」は一步一步北へと向かいます。福島に着するのがいつになるのかは、誰にもわかりませんが、一人でも多くの方が「笑い仏」に手を合わせ、そこで縁を繋いでくれることで、東北の復興について、少しでも思いをはせてくれればと、切に願っています。



津観音と五重塔

### 【津観音】のご紹介

(\*編集担当追記)

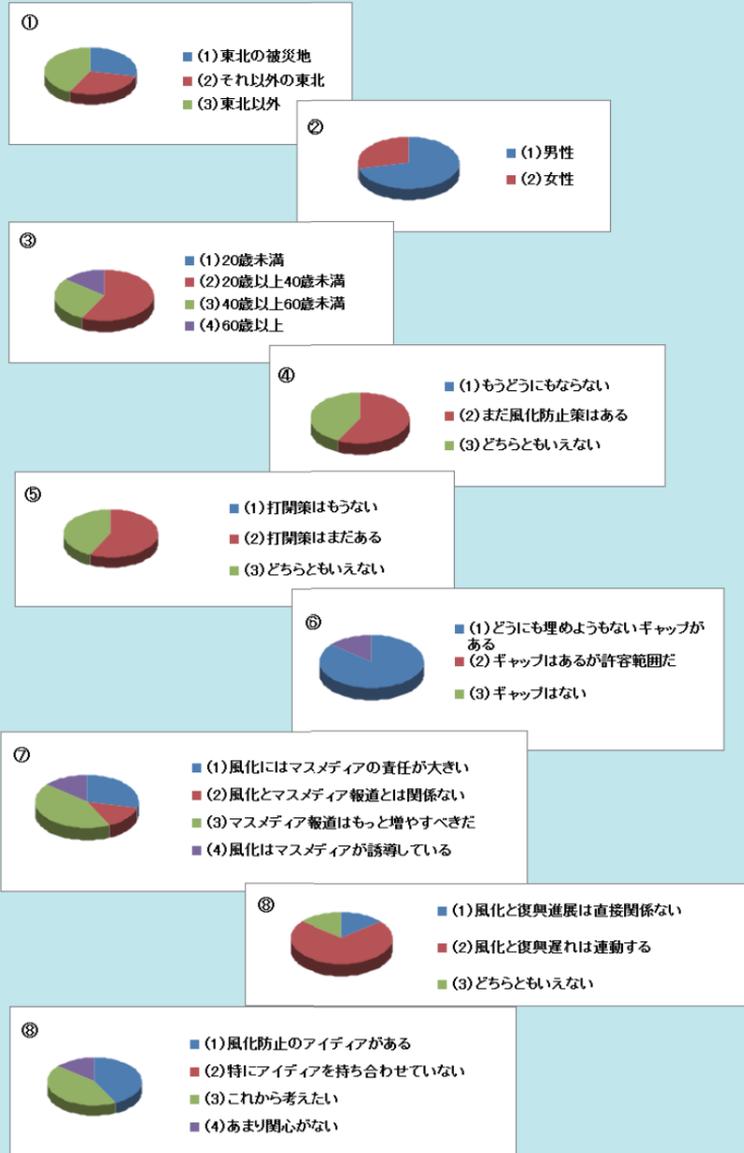
三重県津市大門にある寺院。寺号は詳しくは恵日山観音寺と称する。宗派は真言宗醍醐派。本尊は聖観音菩薩。浅草観音、大須観音と並んで日本三大観音の一つとされる。

所在地	三重県津市大門 三二番一九号	札所等	三重四国八十八 箇所67番札所
山号	恵日山		伊勢西国三十三 所観音霊場 19番札所
宗派	真言宗醍醐派		日本三大観音
本尊	聖観世音菩薩 国府阿弥陀		
正式名	恵日山観音寺	公式HP	津観音

## 第11号 ネットアンケート集計結果

### 【 東北大震災風化防止の方策 】

No.	質問と選択肢	回答数
①	現在住んでいる場所	
	(1)東北の被災地	2
	(2)それ以外の東北	2
	(3)東北以外	3
②	性別	
	(1)男性	5
	(2)女性	2
③	年齢	
	(1)20歳未満	0
	(2)20歳以上40歳未満	4
	(3)40歳以上60歳未満	2
	(4)60歳以上	1
④	風化はどこまで進んでいると思われますか?	
	(1)もうどうにもならない	0
	(2)まだ風化防止策はある	4
	(3)どちらともいえない	3
⑤	風化の打開策はあると思われますか?	
	(1)打開策はもうない	0
	(2)打開策はまだある	4
	(3)どちらともいえない	3
⑥	東北在住者や東北に縁のある人とない人との現状認識のギャップについて	
	(1)どうにも埋めようもないギャップがある	6
	(2)ギャップはあるが許容範囲だ	0
	(3)ギャップはない	0
	(4)いずれでもない	1
⑦	風化とマスメディア報道の関係について	
	(1)風化にはマスメディアの責任が大きい	2
	(2)風化とマスメディア報道とは関係ない	1
	(3)マスメディア報道はもっと増やすべきだ	3
	(4)風化はマスメディアが誘導している	1
⑧	風化と復興進展の関係について	
	(1)風化と復興進展は直接関係ない	1
	(2)風化と復興遅れは連動する	5
	(3)どちらともいえない	1
⑨	風化防止のアイデアをお持ちですか?	
	(1)風化防止のアイデアがある	3
	(2)特にアイデアを持ち合わせていない	0
	(3)これから考えたい	3
	(4)あまり関心がない	1



【東北大震災風化防止の方策】についてのご回答は七名と非常に少ない結果となりました。テーマ選定や質問項目等に関し、今後留意し、また他メディアであまり取り上げないようなテーマを取り上げるといふ当新聞の特徴を保持しながら、このコーナーを継続してまいりたいと思えます。(アンケート結果)

まず、風化はどこまで進んでいるかとの質問には、約71%がまだ風化防止策はあると回答。風化の打開策はあるかとの質問には、約71%が打開策はまだあると回答。東北在住者や東北に縁のある人とならない人の現状認識のギャップについては、約86%がどうにも埋めようもないギャップがあるという回答。

この結果はある程度予想されていたとはいえ、今後の復興支援や復興そのものにも大きな影響が出てくるのではないかと懸念される点です。

風化とマスメディアの関係については、マスメディア報道はもっと増やすべきが約43%、風化にはマスメディアの責任が大きい約29%、併せて72%がマスメディアの影響を指摘しています。風化と復興進展の関係は、風化と復興遅れは連動するが約71%。風化防止のアイデアは、風化防止のアイデアがある、同数の約43%となりました。

編集後記

今号の最大ニュースは、筆者の生涯初のぶら下がり取材敢行と思う。まさかとは思っていたが、目論見通り、ドンピシャで成功した。2面にも書いたが、「道州制推進フォーラム」での出来事。メディア記者はこのフォーラムに事前予約する必要はない。そこで受付で名刺を渡し、メディアである旨を告げると、受付は態度を変え丁寧な姿勢で記者席にどうぞという。記者席に行くが、誰も知らない。開会のあいさつが始まると一斉にカメラフラッシュ。こちらも負けてはいられない。前の席のどこかのマスメディアのカメラマンがじゃまだ。隙を見てシャッターを押す。メディアに上下はない。大小はあるが。

討論に入り、無性に質問をしたくなる。でも質問タイムはない。イライラ。最後に来た。ぶら下がりが。当然行く。でも壇上にはさすがに行けない。皆顔見知りの感じで、後ろに控えていた。そうしたら、村井知事が取材を切り上げようとした。そこで記事に書いたように、思わず手を挙げた。知事がどうぞと指名。さあ出番だ。

あとで考えたのだが、質問は大メディアが独占していたのかもしれない。そこに見知らぬ「メディア」がちゃんとした格好だった。

## 革物屋（かわもんや）WEB完全リニューアル（WEBを移動しました）

<http://www.birthday-press.com/>（バースデイプレス）→「小物のカテゴリー」→「レザー」

<p><b>ミニバッグ Handy Second</b></p>  <p>持っていたくなる革バッグ。インナーバッグとしてもお使いいただけるセカンドバッグ。革は薄めの柔らかなものを使用し、手触り感を重視いたしました。内側は耐久性のある光沢ナイロン製布を使用。</p>	<p><b>ミニバッグ Tiny Dice</b></p>  <p>用途ご自由の四角いケース。重量40gと比較的軽量の製品ですので、携帯ストラップ用としてお使いいただくもよし、大きなバッグに吊り下げていただくもよし。また、中に贈り物をつめてプレゼントケースとしてのご利用も一考かと。使い方は工夫次第。</p>	<p><b>ミニバッグ Tiny Dice</b></p>  <p>用途ご自由のまるいケース。重量40gと比較的軽量の製品ですので、携帯ストラップ用としてお使いいただくもよし、大きなバッグに吊り下げていただくもよし。また、中に贈り物をつめてプレゼントケースとしてのご利用も一考かと。使い方は工夫次第。</p>
<p><b>モバイルバッグ Beans L</b></p>  <p>レザーでオールマイティ、両方のご満足。これまで、オールレザーでお手頃価格のモバイル端末用バッグは多くありませんでした。また、各モバイル端末専用バッグはありましたが、どの端末でも収納可能なオールマイティバッグも多くはなかったようです。Beans Lは、その両方でご満足いただけるバッグです。</p>	<p><b>モバイルバッグ Beans S</b></p>  <p>レザーでオールマイティ、両方のご満足。これまで、オールレザーでお手頃価格のモバイル端末用バッグは多くありませんでした。また、各モバイル端末専用バッグはありましたが、どの端末でも収納可能なオールマイティバッグも多くはなかったようです。Beans Sは、その両方でご満足いただけるバッグです。</p>	<p><b>モバイルバッグ Handy Pouch</b></p>  <p>あなたにお供するポーチ。持ち運び可能で、デスクやテーブルに置いて開け閉めできるポーチ。上下蓋部分の内側にスポンジを挟み込んでおりますので、モバイル端末機器の付属品の収納にもお使いいただけます。</p>